

「幹部とは」

1. 限度のある仕事は評価が可能

仕事は「これだけやる！」でなければならない。

仕事に限度があるからこそ「やっけてしまおう」と思える訳である。

もしも、仕事をやっても、限りがなければ「先に、ゆっくりしてから・・・」ということになってしまう。

部下に仕事をさせる場合は、とにかく限度を決めることである。

仕事の質と量を明確にしなければならない。

これが、幹部の仕事である。

2. 適材適所

幹部には、上に行くほど仕事が出来る人も居れば、逆に、上に行くほど仕事が出来なくなる人も居る。

素質・努力・性格を見極める。

人間、努力だけで上に上がれるものではない。素質というものも大切。

そして、その上に大事なものは、その人間の性格。素質や努力以前に大切なもの。

物事を素直に取れない、冷めた目でしかものを見ない。

こういう人とは、苦勞を共にすることは不可能。多くの部下を任せられない者。

これを上司に持って来ると、部下達にとっては大変な迷惑。不平不満・組織の歪みの発生元である。

性格が良くても、能力の無い上司になっても困る。

部下に利益（その部署の「和（人間関係の円滑化）」を作れるということ。）を与えられない者が、上に立って権力を振り回すのは、迷惑の何ものでもない。

また、喧嘩に勝てないような者にも、これまた人は付いて行くことは出来ない。

人を使える者には、役職（地位）を与えること。

人を使えないが、能力の有る者は、給料面で優遇してやること。

3. 秩序あるチームプレー

皆が仕事をしている中で、一人の不心得者が新聞を読む。

皆が掃除をしているのに、一人の不心得者がタバコを吸っている。

こういう状態になると、雰囲気が一発で崩壊する。

仕事に対するヤル気が損なわれる。

リーダーにチームをまとめる能力が無いと、秩序は保てない。

リーダーシップの取れる人間か否か？！

これが秩序あるチームプレーの可否である。

4. 人間関係に於ける締め括り

前提として、管理者足り得ること。

第一線で活躍する人達と、これを管理監督する者、各々への応対。

第一線で活躍する人達には、天下の形勢（政治・経済・世界情勢）は余り関係がない。

それよりも彼等を、お祭り気分引き込むことの方が肝要になる。

言い換えると「雰囲気作り」が大切。

一般社員や職人は、理屈では付いて来ない。

「共に神輿を担ぐこと」の方が大事。

身分の上下や、貧富の差に関係なく、一つに成れるから。

身分の上下や貧富の差を忘れて、共に働き、共に汗を流す。という、この「共に」という気持ちが盛り上がって行くこと。

ここで大事なものは、管理者である。

この会社に命を託して行く者。少なくとも、気持ちの上で一生を託そうと考える者。

管理者にとって一番大事なことは「会社の将来性」である。

そこには、天下の形勢も関係して来る。

一生を、この会社に託すのなら、会社の将来の繁栄の為に、自分は如何にあるべきか、これを考えなければならない。そして「忙しい」と言う前に、部下に対する仕事の与え方をよく考えて「忙しい」と「仕事量」は、必ずしも比例しない。

能率が上がらないから「忙しい」となっているのである。

5. 民主経営とは、衆議独裁である

物分りの良い上司になれ・・・は、下を見ることばかり。

良い上司ならば、部下が一所懸命やってくれるもの。

「下を見る前に、上を見るのが大切」

一、己の任務を把握せよ。

下を見る前に「己の任務は何か」ということを考えてほしい。

つまり「社長は、私に何を期待しているのか」と考えることが、管理者としての

「私の仕事」これは社長の方を見ない限り、出て来ない。

その「私の任務」を部下にどう分担させるか、これが「私の仕事」である。

上を見ない限り、己の仕事は出て来ない。部下に何をさせるか、が出て来ないのは、

先に部下の方を向くからである。

「先ず、上を見る！」そして自己管理をすること。

二、自覚を持て。

会社への自らの貢献度を測定して、評価してみること。

有能な管理者とは、業績を上げる人であり、同時に指導者としての自覚を持った人。

単に仕事が出来ただけでなく、人生観や社会観をも、部下に教えてやれる人。

そこで初めて、部下に仕事をさせることが出来るのである。

三、企業は、結果の如何であって、経過の如何ではない。

第一目的は、企業の繁栄である。責任を取れる者に決定権がある。

四、己の策を持つて。

手腕のある経営者なら、幹部に意見を聞かないと決定出来ないという人では当然ない。

幹部に意見を聞かないと、策に困るという人も、一人も居ないものである。

では、何故会議をするのか？

第一には「意見を待つ」・・・自分と同じ意見を待つ場である。

自分が先に意見を言えばワンマンと言われる。

第二には「策の補強」・・・この点については自分の読みが甘かったな、、ということ。

第三には「皆の気持ちを盛り上げ、一つにする」

トップの考えが確固としたものであれば、幹部は惑うことなく、自分の方針を打ち出して行けるものである。

社長は、自分の考えていることと同じことを考えてくれる部下なればこそ、仕事を任せられるのである。同時に、幹部として部下の知恵を借りない限り、策を立てられないような間抜けな人間なら、今後社長の片腕となる管理職は務まる筈もない。

但し、参考意見や、情報を多方面から集めることは、大事である。

しかし、策は自らが立てなければならない。

五、プロの世界に生きよ。

実を結ぶ努力をしてほしい。実を結ぶ努力でないと、却って混乱を生じさせる結果となりやすい。

プロとプロ同士の戦いというのは、囲碁で言うと、わずか二目しか差が無いのである。